

共同研究B、責任者のアポロジー

清 水 多 吉

以下は、人文科学研究所の共同研究B「どこからどこへ」の報告である。われわれがこのようなテーマを設定したのは、「20世紀末」という時代を踏えてのことである。普通、「世紀末」と言えば、時代の転換期あるいは次の時代への大いなる過渡期という意味あいを持つ。しかし、J. ハーバーマスも述べているごとく、「長かった19世紀」に対して、「20世紀は短かった」。彼の時代区分によれば、19世紀は1789年に始まり、1918年に終り、20世紀は1920年代に始まり、1980年代末に終る。この時代区分が何を意味しているかは明白であろう。彼の主張によれば、現在は次の時代に入ったという自覚なしに、次の時代に入っていることになる。また、別な言い方をするなら、「海図なき時代」を船出したとっていいかも知れない。私の報告に引き寄せての論評で恐縮するが、ここでも不安なき不安の時代の「空間」的自己確認のイメージが強く押し出されている。思えば、19世紀末はまことにベル・エポックの時代、幸せな時代であったと言える。科学技術には何らの疑問符もつけられていなかったし、古典趣味も装飾過剰も反動よばわりされることもなかったし、エンターテインメントも素直に生活「空間」の中に入りこみえた。しかるに、20世紀末の現実では、すべて

に疑問符がつけられ、冷笑の対象にされ、シニカルな肯定によって受けとめられている。われわれの問い「どこからどこへ」は、このような時代へ向けられている。

もとより共同研究であるからには、共通の認識に基づき、共通のテーマについて、それぞれ論文を執筆していただくべきであったかも知れない。しかし、共同研究者の人数が何分にも多数でありすぎた。しかも、研究領域が、哲学、社会学、英文学等多方面にわたっていた。この3年間、われわれは数度にわたって研究会、発表会をもってきて、意志の統一を計ろうとしてきた。だが、結論は、メインテーマ「どこからどこへ」を共通の問題意識として、それぞれ従来からの専門分野の中での論文を執筆してもらうより他なしということになった。なかには、共通の問題意識からややはずれた論文も無きにしもあらずであるが、その論文の執筆者といえども、数度の研究会に出席していただき、真摯な討論を積み重ねていただいた。

最後の段に至って、総まとめに時間がかかり、必ずしも統一性を保ちえなかった責任の一端は、責任者清水にある。各位のご寛恕を乞う次第である。